

都城市文化財調査報告書

第 1 集

祝吉遺跡

1981年

都城市教育委員会



序

都城市文化財調査報告書「祝吉遺跡」をここに刊行いたします。本遺跡は都城市が実施中の、祝吉・郡元地区区画整理事業の施工に伴い発見されたものであります。その発見が55年度工事の大半を終えたあとでもあり、調査対象区域となり得たのは、極く一部分に止まつたものであります。

調査にあたっては、宮崎県教育委員会、特に県文化財保護審議会の石川恒太郎委員、並びに終始調査の実際を担当、かつこの報告書の作成にも全面的にご苦労いただいた県文化課の北郷泰道主事のご指導とご尽力によるところが極めて大きく、深く謝意を表するものであります。また発掘調査にご協力いただいた祝吉自治公民館の高橋正利館長をはじめとする地元市民各位にも、心からお礼を申しあげたいと存じます。

本調査並びにこの報告書が、当地方の地方史の解明と文化財保護の一助となることを期待しまして序文とします。

昭和56年3月1日

都城市教育長 刀坂守信

例　　言

1. 本書は祝吉・郡元土地区画整理事業に伴ない、都城市教育委員会が実施した祝吉遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、昭和55年9月24日から昭和55年10月17日まで実施した。
3. 調査関係者は次の通りである。

調査主体

都城市教育委員会

教　育　長	刀　　坂	守　　信
教　育　次　長	井　之　前	尚
図　書　館　長	瀬　戸　山	計　佐　儀
図書館長補佐	松　　下	義　弘
文化財担当	遠　　矢	昭　夫
調　　査　　員	北　　郷	泰　道

(県教育庁文化課主事)

宮崎県文化財保護指導委員　児　玉　三　郎

4. 本報告書の執筆編集等作成に関わるすべては、北郷が行った。
5. 本報告書に用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
6. 土層図中の土色は、「標準土色帖」(監修、農林省農林水産技術会議事務局)を基とした。
7. カラーオンスケッチについては、遠矢昭夫が撮影した。
8. 炭化樹種については宮崎大学農学部大塚誠講師に玉稿をいただいた。

本文目次

第Ⅰ章 序 説.....	1
1. 発掘調査に至る経過.....	1
2. 遺跡の位置と環境.....	1
3. 発掘調査の経過と概要.....	2
第Ⅱ章 包含層の状態.....	5
第Ⅲ章 弥生時代の遺構と遺物.....	6
1. Y—1号住居跡.....	6
a. 遺構.....	6
b. 遺物.....	6
2. Y—2号住居跡.....	14
a. 遺構.....	14
b. 遺物.....	14
3. Y—3号住居跡.....	22
a. 遺構.....	22
b. 遺物.....	22
4. Y—4号住居跡.....	23
a. 遺構.....	23
b. 遺物.....	24
5. Y—5号住居跡.....	25
a. 遺構.....	25

6 . Y — 6 号住居跡	26
a . 遺 構	26
b . 遺 物	26
7 . Y — 7 号住居跡	27
a . 遺 構	27
b . 遺 物	28
8 . 土壌及び表採の遺物	30
第IV章 中世の遺構と遺物	32
1 . 住居跡及び溝状遺構	32
a . 遺 構	32
b . 遺 物	32
第V章 結 語	33
付 論 祝吉遺跡木材炭化物	(大塚誠) 34

挿 図 目 次

第1図	遺跡所在地図	3
第2図	祝吉遺跡遺構配置図（縮尺1/600）	4
第3図	祝吉遺跡柱状土層図	5
第4図	Y-1号住居跡実測図（縮尺1/80）	7
第5図	Y-1号住居跡出土弥生土器実測図（縮尺1/4）	9
第6図	Y-1号住居跡出土土錐様土製品実測図（縮尺1/1）	10
第7図	Y-1号住居跡出土石包丁実測図（縮尺1/2）	11
第8図	Y-1号住居跡出土磨製石鎌・未製品実測図（縮尺1/2）	13
第9図	Y-1号住居跡出土管玉・鉄鎌実測図（縮尺1/1）	14
第10図	Y-2号住居跡実測図（縮尺1/70）	15
第11図	Y-2号住居跡出土弥生土器実測図（1）（縮尺1/4）	17
第12図	Y-2号住居跡出土弥生土器実測図（2）（縮尺1/4）	19
第13図	Y-2号住居跡出土磨製石鎌実測図（縮尺1/2）	21
第14図	Y-2号住居跡出土石包丁及び石包丁未製品実測図（縮尺1/2）	21
第15図	Y-3号住居跡実測図（縮尺1/80）	22
第16図	Y-3号住居跡出土弥生土器実測図（縮尺1/4）	23
第17図	Y-3号住居跡出土磨製石鎌実測図（縮尺1/2）	23
第18図	Y-4号住居跡実測図（縮尺1/80）	24
第19図	Y-4号住居跡出土弥生土器実測図（縮尺1/3）	24

第20図	Y—5・6号住居跡実測図（縮尺1/80）	25
第21図	Y—6号住居跡出土長頸壺形土器実測図（縮尺1/4）	26
第22図	Y—7号住居跡実測図（縮尺1/80）	27
第23図	Y—7号住居跡出土弥生土器実測図（縮尺1/4）	29
第24図	1号土壙出土高杯脚部実測図（縮尺1/4）	30
第25図	2号土壙出土弥生土器実測図（縮尺1/4）	30
第26図	表採弥生土器実測図（縮尺1/4）	31
第27図	祝吉遺跡出土緑釉陰刻牡丹文水注実測図（縮尺1/3）	32

図 版 目 次

カラー口絵 緑釉陰刻牡丹文水注

図版1 (1) 遺跡遠景

(2) Y—1号住居跡

図版2 (上) Y—1号住居跡

(下) Y—1号住居跡東南隅及び2号土壙遺物出土状況

図版3 (上) Y—2号住居跡

(下) Y—2号住居跡高杯及び小型壺形土器出土状況

図版4 (1) Y—2号住居跡鉢形土器及び小型壺形土器出土状況

(2) Y—2号住居跡小型器台及び小型鉢形土器出土状況

図版5 (1) Y—2号住居跡器台及び小型鉢形土器出土状況

(2) Y—2号住居跡及びY—3号住居跡

- 図版6 (1) Y—3号住居跡
(2) Y—4号住居跡及び3号土壙
(3) Y—7号住居跡
- 図版7 (1) Y—6号住居跡
(2) Y—5号住居跡
- 図版8 (1) 中世遺構
(2) 中世遺構
- 図版9 Y—1号住居跡出土弥生土器
- 図版10 Y—2号住居跡出土弥生土器
- 図版11 Y—2号住居跡出土線刻文壺形土器
- 図版12 Y—2号住居跡出土弥生土器
- 図版13 Y—3号・Y—4号住居跡出土弥生土器
- 図版14 Y—7号住居跡出土線刻文壺形土器
- 図版15 Y—6号・Y—7号住居跡出土弥生土器及び表採弥生土器
- 図版16 (1) 表採櫛描波状文土器
(2) 第I地区出土「洪武通宝」「大中通宝」
- 図版17 Y—1号住居跡出土磨製石鎌・未製品
- 図版18 Y—1号住居跡出土土錘様土製品ほか

第Ⅰ章 序 説

1. 発掘調査に至る経過

昭和55年9月1日、都城市区画整理課が事業を行っている祝吉・郡元土地区画整理事業区内（都城市祝吉町5746番地8外）から弥生土器片等が出土しているとの連絡が、宮崎県文化財保護指導委員児玉三郎氏から都城市図書館にもたらされた。早速図書館では、県文化財保護審議会委員石川恒太郎氏に現地確認を依頼し、同氏により工事切り取り面に溝状遺構及び住居跡と思われる断面が確認され、弥生時代集落跡の存在の可能性が指摘された。

市図書館ではそれを受け、市区画整理課に工事を一時中止することを要請すると共に、県文化課と連絡をとり、県文化課、市区画整理課、市図書館の三者間で協議を重ねた結果、昭和55年9月24日から同年10月17日までの20日間にわたり発掘調査を行ない、記録保存の措置をとることにした。

2. 遺跡の位置と環境

祝吉遺跡は、大淀川の支流沖水川左岸の低位河岸段丘上に位置し、日豊本線都城駅の北北東約1.3kmの地点に所在する。沖水川からは、南方へ約0.5kmあり、その間は低湿地となり水田として利用されている。

これまで、同地周辺ではあまり原始・古代の遺跡の存在は知られていなかった。祝吉遺跡の南東約2.2kmにある年見川遺跡（第1図5）が、これまで唯一発掘調査された弥生時代の集落跡である。年見川遺跡は、昭和39年12月4日から同月10日まで、九州大学教授（当時）鏡山猛ほか石川恒太郎、日高正晴、栗原文藏の各氏らが参加し、溝状遺構、住居跡等が発見されたものである。⁽¹⁾

その他、縄文時代の遺跡としては、祝吉遺跡の南南東約5.4kmの地点に、昭和43年と昭和47年の2回にわたり宮崎大学教授（当時）田中熊雄氏によって発掘調査された成山遺跡（第1図7）が所在している。⁽²⁾

又、古墳時代の遺跡としては、祝吉遺跡の南0.7kmに沖水第1号墳（第1図3）、南東約1.7kmに沖水第2号墳（第1図4）、西1.3kmに祝吉遺跡と同じく沖水川左岸の低位河岸段丘上に位置し、昭和41年7月石川恒太郎、栗原文藏氏によって26基の地下式横穴が発掘調査された牧原地下式横穴群（第1図2）が所在している。⁽³⁾

さて、祝吉遺跡の東約0.8kmの地点に、「島津家発祥地」として知られる祝吉御所跡があ

る。建久7年（1196年），島津忠久は三州守護職に補せられ，薩摩山門院に入り，翌年の建久8年（1197年）には島津荘に移り，この地に居を定めたとされている。⁽⁴⁾昭和6年3月に刊行された『宮崎県史蹟調査第八蹟，北諸県郡及都城市』によると，「宇祝吉3447ノ2 番11歩，柳田盛久所有地，土壤をなせる所に，碑を立て」「宇祝吉3466乙イ號及びロ號の處に門址なりとて，調所に石を築てあり，前記柳田氏所有地の南約20間を隔てゝ井ノ跡と称する所あり，又習馬塙の跡といふも，附近の畠中に残って居る」と記されている。

今回の発掘調査によって，祝吉御所に關係すると思われる遺物も出土しており，祝吉御所をめぐって考古学的方法からする歴史時代の追求も必須のものとなろう。

祝吉御所跡の西0.3kmに池島と呼ばれる泉の湧く池があり，そのほとりに早水神社があるが，この池水は灌漑用水として利用されているほか，祝古遺跡の周辺にも多くの池と縱横にめぐる河川があり，こうした環境が同地周辺に，定住に適した居住空間を提供したものと思われる。

3. 発掘調査の経過と概要

祝吉遺跡が遺跡地として確認されたのは，既に昭和55年度の祝吉・郡元土地区画整理事業が掘削に関わる工事の大半を終えた時点であった。そのため，ようやく発掘調査の対象となり得たのは掘削土の土置き場として保たれていた最後の2地点，合計1,000m²たらずの場所である。道路建設予定地として掘削された場所の東側の調査区を第Ⅰ地区，西側の調査区を第Ⅱ地区と呼ぶことにした（第2図）。

発掘調査はまず，山のように盛られた掘削土の除去からはじめなければならなかった。そこで，掘削土除去と表土剥ぎまでを重機で行うことにして，作業の能率化をはかった。

表土剥ぎを終えた段階で合計8箇所の住居跡らしい落ち込みと，溝状造構及び数箇の土壤を確認した。調査は，第Ⅰ地区北側の住居跡からはじめ，次に第Ⅱ地区の互いに接する2箇所の住居跡へと移った。前者は後に15世紀以降の中世～近世の住居跡と考えられたもので，後者は後に弥生時代の住居跡としてY-1号，Y-2号住居跡と呼ぶことになったものである。

第Ⅰ地区において確認された住居跡は，4箇所であるが，その内15世紀以降の中世～近世の住居跡と考えられたものは，発掘調査の結果2箇の住居跡が重複したものであることが判明した。又、Y-7号住居跡は，大小6箇の土壤と重複するものであることが判明した。



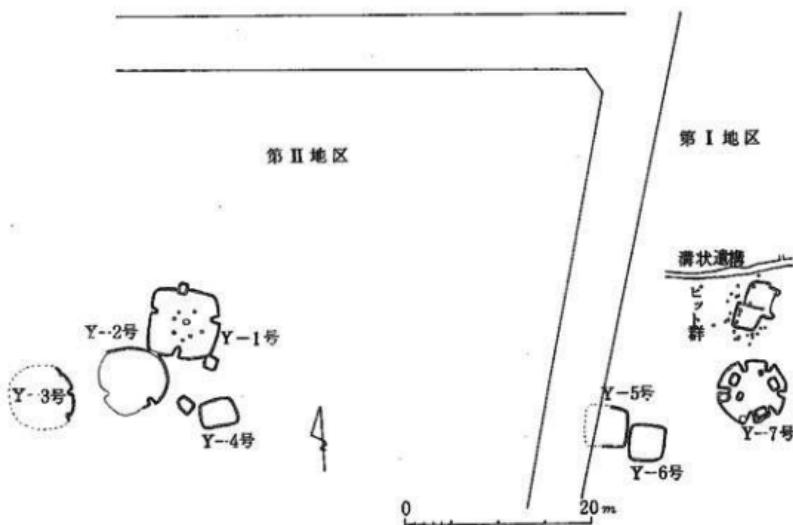
第1図 遺跡所在地図

- | | | |
|-----------|-------------|-----------|
| 1. 祝吉遺跡 | 2. 牧ノ原地下横穴群 | 3. 沖水第1号墳 |
| 4. 沖水第2号墳 | 5. 年見川遺跡 | 6. 鷺尾遺跡 |
| 7. 成山遺跡 | 8. 都島城跡 | 9. 都城古墳 |

第Ⅰ地区周辺の工事切り取り面では、さらに2～3箇所の住居跡と思われる断面を確認していたが、危険性が伴なうため発掘調査には至らなかった。

第Ⅱ地区において確認されたのは、住居跡4箇所、土壙3箇所である。2箇の土壙はY-1号住居跡と重複し、Y-1号住居跡とY-2号住居跡とは互いに接している。

第Ⅲ地区周辺の工事切り取り面でも、溝状遺構、住居跡などの片鱗を確認しているが、ほとんどが重機により破壊されていた。



第2図 祝吉遺跡遺構配置図 (縮尺1/600)

第Ⅱ章 包含層の状態

祝吉遺跡における標準的な土層は次のとおりである。

I層 表土(耕土) 黒色を呈する粘質性の強い
土壤である。

II層 ボラ層 透構はすべてこの層に振り
込まれている。この地域特有
の降下鉄石層で、厚さ約 9.7
cmである。

III層 黒色土層 黒色の腐植土層で、厚さ約
3.8cmである。

IV層 第1オレンジ(アカホヤ)層
南九州に広く分布する黄橙
色絆石火山灰層で、厚さは約
3.8cmである。6500~600
0年B.C.とされ、縄文早期
と縄文前期の境となる鍵層である。

IV'層 バミス層 IV'層と同層であるが、2~5mm程度のバミスが約3cmほどに明
瞭に層を成している。

V層 黒褐色土層 やや硬質の腐植土層で、厚さは約2.2cmである。

VI層 灰褐色土層 約3.0cmの厚さである。

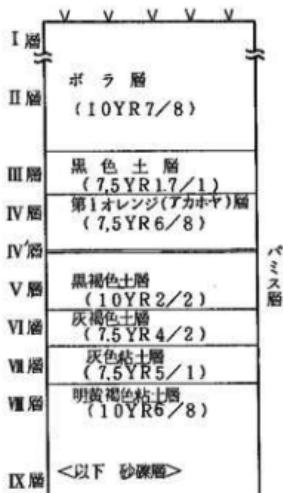
VII層 褐灰色粘土層 約1.8cmの厚さである。

VIII層 明黄褐色粘土層 水分の多い粘土層で、厚さは不明である。

IX層 砂礫層 遺跡地の基層部を成す層で、拳大の礫を含む。

都城盆地の形成は、湖であった同地に、周囲のシラス層、四万十層群の浸食された砂礫、粘
土等が堆積し、湖水の排水とともに湖底が浸食され、一段低くなつた盆地東側に層状地が形成
⁽⁶⁾
され出来上がつたとされている。上記土層のIX層砂礫層上に堆積したVII層、VIII層の粘土層など
は、それを物語るものであろう。

出土した遺物は弥生土器、輸入陶器等がほとんどすべてであるといえるが、1点縄文後期土
器が出土しており、周辺にこの時期の包含層が存在していたものと思われる。



第3図 祝吉遺跡柱状土層図

第Ⅲ章 弥生時代の遺構と遺物

1. Y-1号住居跡

a. 遺構(第4図)

Y-1号住居跡は、南北幅7m×東西幅7m×7.6cmのほぼ正方形の竪穴住居跡である。住居跡を埋めた黒色土とボラ層上の黒色土層とは区別し難く、住居跡本来の掘り込み面は不明であるが、ボラ層上面からボラ層中に掘り込まれた床面までの深さは、約20cm程である。東西南の三方には、間仕切りの機能を持つと考えられる最大幅約40cm、長さ約70cm程の張り出し部が設けられている。ピットは7箇所検出されたが、P3が深さ約14cmで柱穴としての機能に疑問が持たれるほかは、深さ40~50cmで主柱の柱穴の役割りを充分に果たすものである。また、住居跡周辺でのピットの検出も試みたが、かなり離れた地点で10箇所のピットが存在したのみで、直接住居跡と関係付けられるものではなかった。

住居跡の中心部では焼土の遺存が認められ、焼土除去後の精査により、長軸7.3cm×短軸4.6cm程の長椭円の掘り込みが検出され、炉の存在を示している。床面からの深さ32cmである。

住居跡の特徴は、南西二方の張り出し部で間仕切ることの出来る西壁周辺に粘土と磨製石器の未製品が多量に出土していることで、住居跡全体のほぼ4分の1にあたる同南西コーナーは磨製石器の製作に関わる役割をもつ区画であったと考えられる。同コーナーからの土器類の出土は稀薄で、石包丁片2点、管玉1個、鉄器の基部分と思われる鉄製品1点が出土している。

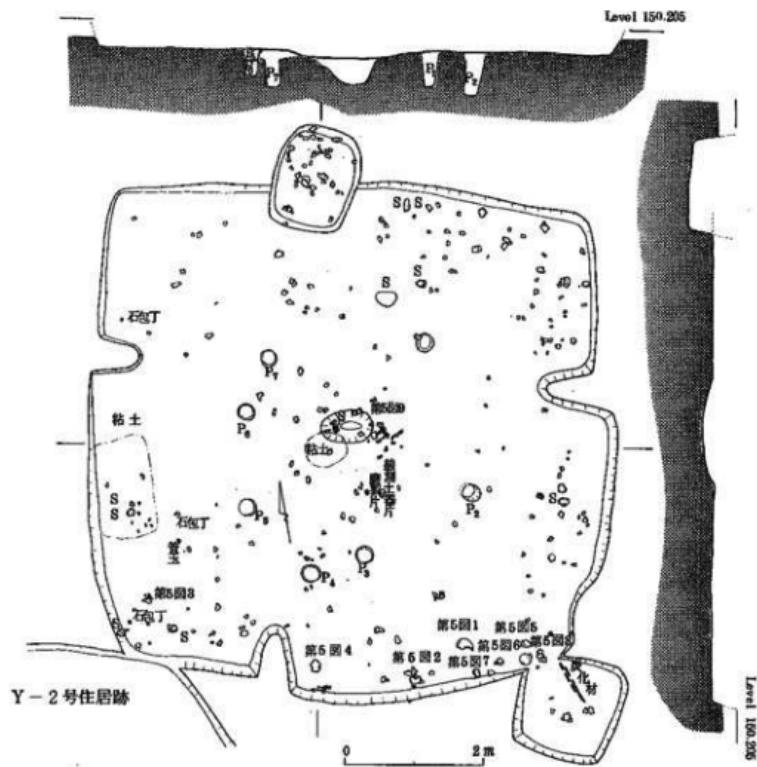
土器類の出土が多くみられたのは、東半分のコーナーで、ここに東壁の張り出しの北側に土器片の密集がみられ、南隅では完形に近い壺形土器が得られている。また、中央炉周辺には、土器細片が多く、「四」の字に似た線刻文土器片も出土している。

b. 遺物(第5図~第9図)

土器(第5図)

壺形土器(第5図1・2)

1は、住居跡の東南隅から出土している。口縁部が小さく、腹部にかけて脹らみ、頸部の低い器形を示す。胎土には石砂粒を多く含み、色調は茶褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成は良好である。煤がわずかに付着している。砂質のやや強い胎土であるため、風化が著しく、表裏共調整は不明であるが、ナデ調整されているものと思われる。器壁の厚さ約0.8cm、口径は15.8



第4図 Y-1号住居跡実測図(縮尺1/80)

cm、現存胴部最大径は25.4cmを測り、現存器高14.3cmである。

2は、1の西約30cmのところから出土している。口径と胴部最大径とがほぼ等しくなる器形を示し、器面の調整は、表面の口縁部から頸部までがタテのハケ目で、頸部まで止められ内面の同じ部位はヨコ方向での短く連続的なハケ目で、胴部にかけては、やや斜位の細かいハケ目で行われている。胎土には石砂粒を比較的多く含み、淡黄褐色を呈し、焼成はさほど良くない。器面には、焼が厚く付着しており、二次加熱によるスボイリングが進行している。器壁の厚さ約0.8cm、口径は15.6cm、胴部最大径も15.6cmで、現存器高約10cmを測る。

高杯形土器（第5図3.9）

3は、高杯形土器の脚部で西南隅のY-2号住居跡寄りから出土している。胎土は精緻なもので、淡黄褐色を呈し、焼成は良好で良く焼きしめられている。調整は、タテのヘラ磨きで、内面にはしづら目を観察することが出来る。最小径5.0cm、現存最大径8.0cm、現存高8.0cmを測る。

4は、中央が跡跡辺から出土している。胎土に混入された石砂粒は少なく精緻な胎土で、表面は淡黄褐色、内面は一部黒灰色を呈し、焼成も良好である。調整はタテのヘラ磨きで、円形の透孔を認める。底部径19cmを測る。

鉢形土器（第5図4）

4は、口縁部の大きく開く、浅鉢形の土器である。器面はよくナデ付けられたなめらかな表面をもち、内面は口縁部がナデ、頸部から胴部にかけてがタテあるいはナメのハケ目で調整されている。底部は平底で、胴部との境に指頭痕を残す。胎土にはやや大きめの石砂粒を混入し、淡黄褐色を呈し、焼成は良好なものである。器壁厚約0.7cm、口径18.8cm、頸部径15.4cm、底部径5.6cm、器高10.4cmを測る。

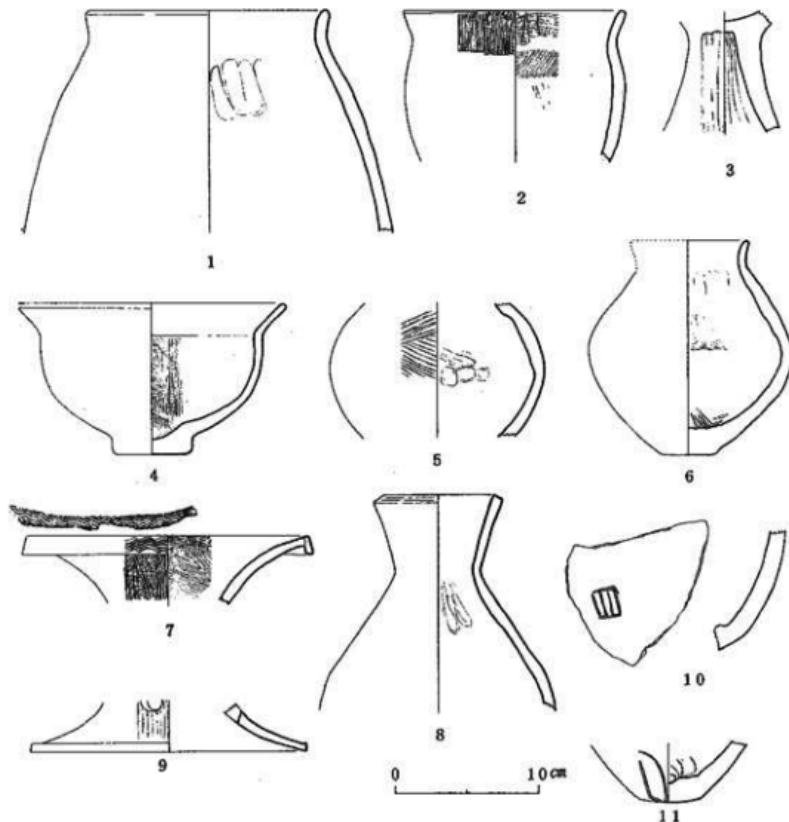
臺形土器（第5図5～8）

5は、東南隅2号土壤寄りで出土している。肩部から胴部最大径部までが斜位のヘラ磨きで以下は削り調整である。胎土の石砂粒は少量で、色調は表面が黄褐色、内面が灰褐色～黒灰色を呈し、焼成は良好である。器壁厚約0.8cm、胴部最大径15.0cmを測る。

6も5と同じ場所から、近接して出土している。器面の調整は不明であるが、内面の肩部から頸部にかけて、指頭による調整の跡を認めることが出来る。又、底部内面はヘラ先で粗く成

形されている。胎土は砂質が強く、器面はやや脆い。色調は褐色、内面は暗黄褐色を呈し、焼成は良好である。推定口径 8.6 cm、胸部最大径 14.3 cm、底部径 3.6 cm、器高 14.8 cm を測る。

7 は、櫛描波状文をもつ壺形土器の口縁部である。外反させた口縁部を形作ったのち、端部に粘土帯を張り付けることで口縁部は作られており、櫛描波状文が施されている。器面はタテのハケ目、内面は口縁端部がヨコのハケ目で、頭部にかけてが斜位のハケ目で調整されている。



第 5 図 Y-1 号住居跡出土赤生土器実測図 (縮尺 1/4)

胎土の石砂粒は少なく、色調は赤褐色～黄褐色を呈し、焼成は良好である。推定口径 19.6 cm である。

8は、胴部のあまり張らない、やや長胴を成す器形を示している。口縁部はやや凹みをもち器面はナデ調整である。石砂粒の少ない精緻な胎土で、赤褐色を呈し、焼成は良好である。口径 9.0 cm、頸部径 3.2 cm、現存胴部最大径 16.4 cm を測る。

線刻文土器(第5図 10・11)

線刻文土器が 2 点出土している。

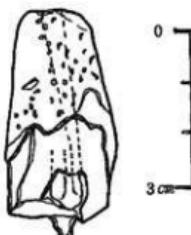
10は、「四」の字に似た線文文のある壺形土器の底部に近い破片で、胎土の石砂粒は少なく、色調は黄褐色、一部黒灰色を呈し、焼成は良好である。

11は、同じく壺形土器の底部片と思われるが、簡単なヘラ先による線刻文が刻まれている。胎土には石砂粒を含み、色調は褐色を呈し、焼成は良好である。底部径 4.2 cm を測る。

土錘様土製品(第6図)

その他、土製品として特異なものが出土しているので報告したい。

胎土にはほとんど石砂粒を含まず、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。上端には 1 個の孔がみられるが、割れ口面では中心に 1 個とややそれにずれた位置に 1 個の合計 2 個の孔がみられる。貫通しているのは、後者の孔とで中心からややすれている。表面には 0.1 cm 程の半蔵及び円形の刺突文が施されている。上端部での径 1.3 cm、現存最大径で 2.2 cm を測る。又、孔径は上端部で 0.4 cm である。



第6図 Y-1号
住居跡出土
土錘様土製品実測図
(縮尺 1/1)

石器(第7図 第8図)

磨製石錐(第8図 21、22)

2 点とも石材は、黒色千枚岩を用いている。21は、完全な製品とはいえないが、現存長 4.2 cm、最大幅 2.0 cm、厚さ 0.3 cm を測る。22は、やや基部を欠損しており、現存長 3.3 cm、最大幅 1.8 cm、厚さ 0.4 cm を測る。凹基式の石錐で、両面とも良く研磨されている。

磨製品石器未製品(第8図1~20 第1表)

西南コーナーから約40点程が出土し、住居跡全体としては50点近くが出土している。

石材には、黒色の千枚岩を用い、一応の製作過程をうかがうことが出来る。1, 2は粗割りの段階で、1次加工の後、若干の縁辺部の剥離を行っている。3, 9, 14, 16では、基部の加工がみられ、凹基式として製作されるが、この段階では縁辺部の二次剥離も進み、14では磨研がはじめられている。

石包丁 (第7図)

1は、西南コーナーからの出土であるが、1~50cm程離れて出土した破片が接合されて完成形となったものである。

黒色の千枚岩系の石材を用い、両面ともよく磨研されている。穿孔は2孔みられるが、1辺に片寄っており、中央に近い穿孔の上部には未完の穿孔跡が残されている。両面から穿孔され円錐形の底面にした断面形状を示し、外孔径1.0cm、内孔径0.4cmを測る。横幅8.8cm、縦幅4.2cm、厚さ0.5cmを測る。

2は、破片で、穿孔をその断片に認めることが出来る。1と同じく、黒色の千枚岩系の石材を用い両面ともよく磨研されているが、片面は平坦で、片刃に近い形状を示している。現存横幅5.7cm、縦幅3.7cm、厚さ0.4cmを測る。

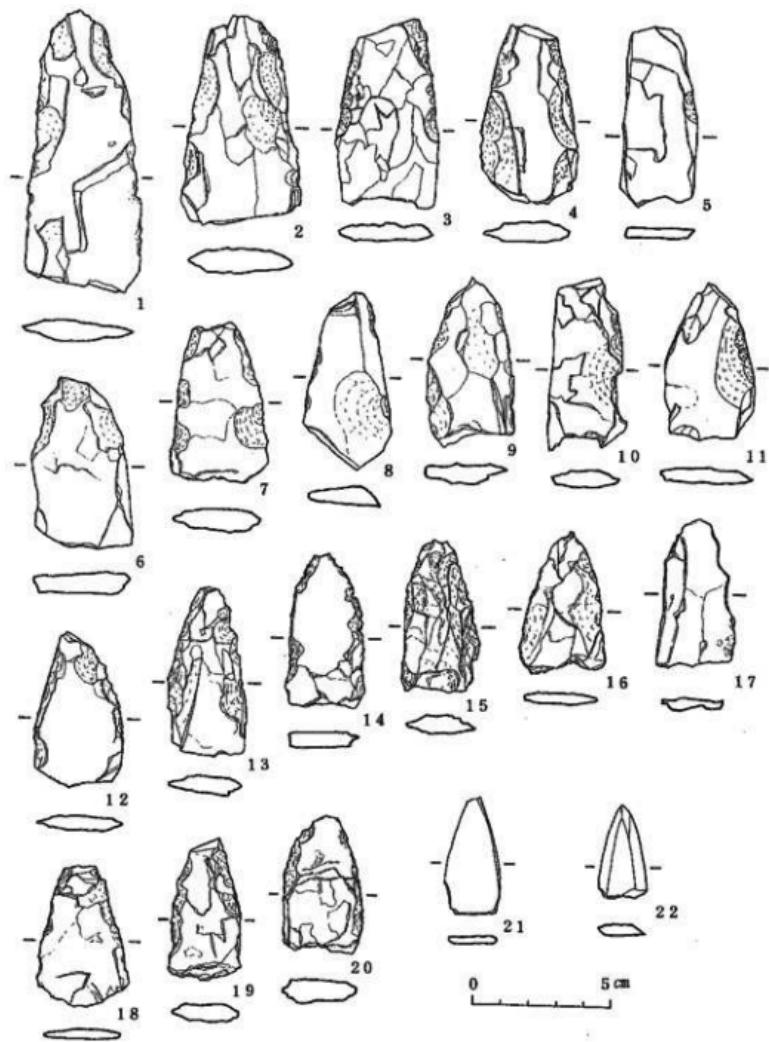
2点とも、刃の部分のみがヨコの磨研で、両面はナナメの磨研である。



第7図 Y-1号
住居跡出土石包丁実測図
(縮尺 1/2)

番号	最大長	最大幅	厚さ	石材	備考
1	9.8	4.1	0.8	黒色千枚岩	
2	7.5	4.2	0.9	"	
3	6.7	3.6	0.6	"	茎部の加工が進んでいる
4	6.4	3.5	0.8	"	
5	6.5	2.7	0.4	"	
6	6.0	3.4	0.9	"	
7	5.6	3.5	0.8	"	若干茎部が加工されている
8	6.3	3.2	0.7	"	不成形であるが磨研されている
9	6.1	3.1	0.6	"	茎部の加工が進んでいる
10	6.1	2.8	0.7	"	
11	5.6	3.2	0.5	"	
12	5.6	3.1	0.4	"	若干磨研されている
13	6.1	2.8	0.6	"	
14	5.5	2.8	0.5	"	磨研がはじめられ、二次剥離が進行している
15	5.4	2.7	0.6	"	
16	5.1	3.1	0.4	"	基部の加工が進んでいる
17	5.3	2.6	0.4	"	
18	5.1	3.3	0.3	"	
19	5.1	2.6	0.6	"	
20	4.9	2.8	0.8	"	基部の加工が進んでいる

第1表 磨製石鐵未製品一覧表 (単位cm)



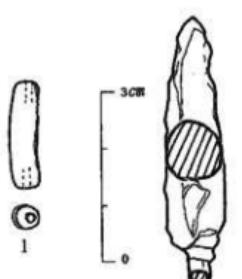
第8図 Y-1号住居跡出土磨製石器・未製品実測図 (縮尺1/2)

その他の遺物（第9図）

管 玉（第9図1）

ガラス製の管玉で、西南コーナーからの出土である。

青白色を呈する。長さ1.9cm、径0.4cm、孔径0.1cmを測り、やや歪つに曲っている。風化が進んでいる。



鉄 鏃（第9図2）

有茎鐵鏃の茎の部分と思われる。矢柄部分が残存しており、最大径約1cm、長さ5.3cmを測る。

第9図 Y-1号住居跡出土管玉
鉄鏃実測図
(縮尺1/1)

2. Y-2号住居跡

a. 遺 構（第10図）

Y-2号住居跡は、Y-1号住居跡の西南隅に接して構築されている。住居跡の西半分は壁面が著しく乱されており、壁面を明らかにすることは出来ないが、推定での南北径約7±10cm、東西径約6m 80cmを測り、形状は不整形な円形を呈している。張り出し部は、住居跡の南半分に片寄って2箇所設けられ、最大幅約60cm、張り出しの長さ約60cmと相対的にY-1号住居跡の張り出し部に対し、幅広で短いものとなっている。掘り込みの深さは、現存の最も深い所で23cm程度である。

住居跡の中心部は、周囲よりやや深く掘り込まれ炉が存在したものと思われるが、全体に不整形で形状は明らかにし難く、また焼土も認められなかった。

住居跡からは、多くの完形品あるいはそれに近いものが出土している。Y-1号住居跡に接する東北コーナーの北寄りからは、小形器台形土器、小型甕形土器、小型鉢形土器、西北コーナーからは、壁寄りで浅鉢形土器、小型甕形土器、やや中央部寄りで高杯形土器、東南コーナーからは、器台形土器等が出土している。

b. 遺 物（第11図・第12図・第13図・第14図）

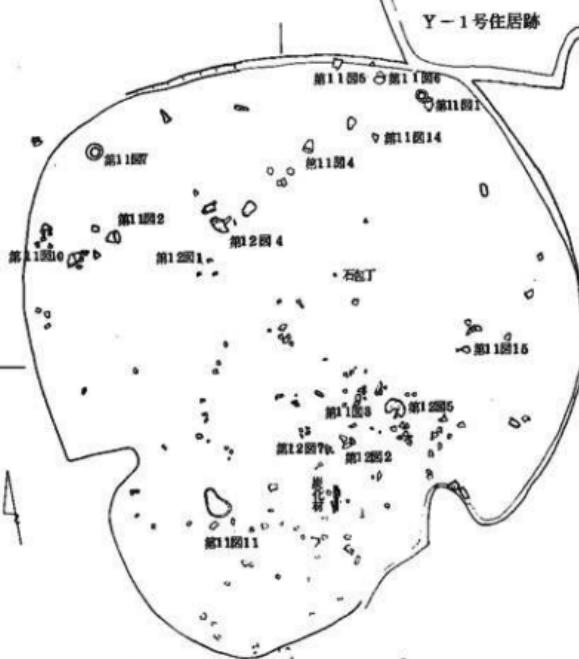
土 器（第11図 第12図）

甕形土器（第11図 1・2・10・11）

1は、小型の甕形土器で、Y-1号住居跡寄りの小型器台形土器と接して出土した。胎土に

Level 150.187

Level 150.187



第10圖 Y-2号住居跡実測図 (縮尺1/70)

は石砂粒を多く混入し、色調は赤褐色～灰褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部の表裏はヨコナデ、頸部はヘラ削り調整されている。底部は上げ底を呈する。口径 1.08cm、頸部径 9.2cm、胴部最大径 9.8cm、底部径 5.2cm、器高 1.25cm を測り、口径と胴部径とはほぼ等しくなる器形を示す。

2も1と同じ器形を示すもので、石砂粒を比較的多く胎土に含み、色調は表面が暗黒褐色、裏面が濃赤褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部と上げ底の底部はつまみ成形され、表面の頸部は粗く不規則なハケ目で、内面はやや不明瞭なナナメハケ目で整形されている。頸部には煤が付着している。口径 1.12cm、頸部径 9.5cm、胴部最大径 1.03cm、底部径 4.9cm、器高 1.68cm を測る。

10は、2の小型壺形土器の近くの西北コーナーから出土している。胎土にはやや大きめの石砂粒を含み、色調は赤褐色を呈し、焼成は良い。器面には煤が付着している。表面の調整はタテ及びナメの細いハケ目で、内面は太いハケ目である。口縁部はナデ調整である。復原で推定口径は 2.02cm、頸部径は 1.84cm、現存の胴部最大径は 2.18cm、器壁厚は約 0.7cm である。

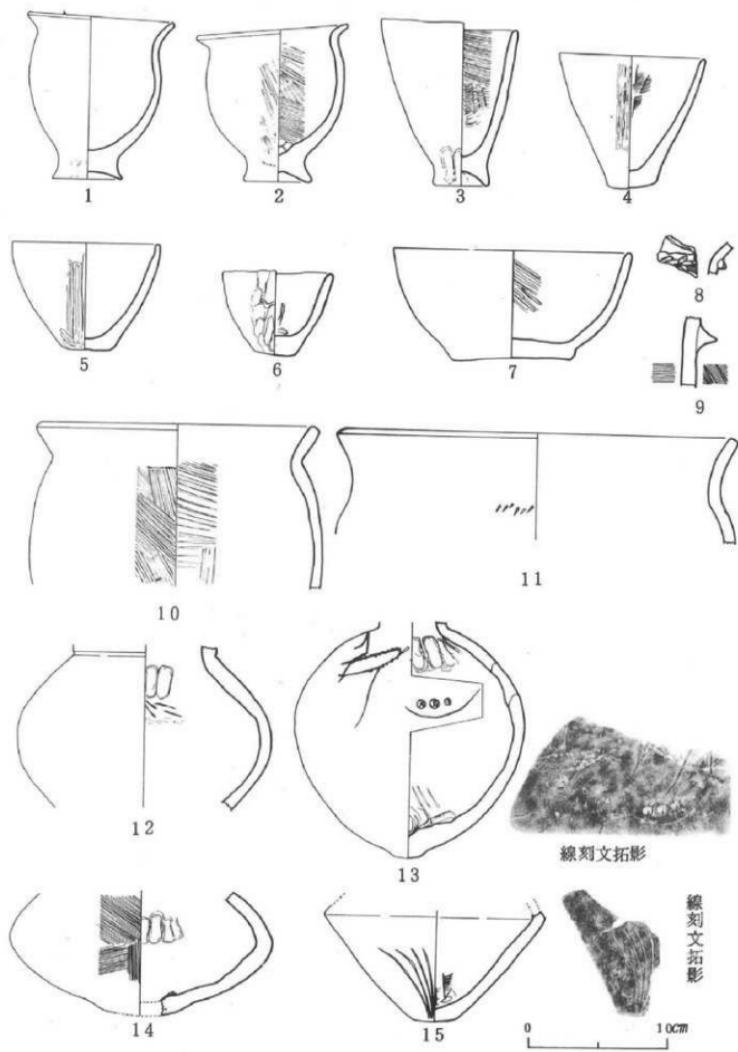
11は、西南コーナーの出土である。胎土には石砂粒を多く混入し砂質が強く、色調は表面が淡黄褐色、内面が灰褐色を呈し、焼成は良である。調整については、器面の風化により不明であるが、頸部にヘラ先によると思われる列点文が施文されている。推定口径 2.88cm、頸部径 2.76cm、器壁厚 0.9cm を測り、やや大きめの壺形土器である。

鉢形土器（第11図3～5・7）

3は、上げ底の底部をもつもので、胎土に混入された石砂粒は少量で、表面は茶褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成はさほど良くない。器面はひび割れが著しく調整は不明であるが、内面はヨコのハケ目である。口径 1.00cm、底部径 4.2cm、器高 1.22cm を測る。

4は、東北コーナーの出土で、石砂粒を比較的多く胎土に混入し、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面には煤が付着している。調整は、表面が不明瞭ながらハケ目、内面がヨコのハケ目で、調整具の止め跡が残っている。その幅約 1.5cm である。口径 1.09cm、底部は不安定な平底で径は 3.5cm、器高 9.9cm を測る。

5は、やや底の浅いもので、石砂粒を比較的多く含み、黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面は粗くヘラ磨きされている。口縁端部は指でつまみ成形され、やや内側に折れている。口径 1.05cm、底部径 3.5cm で、器高は 7.9cm を測る。



第11図 Y-2号住居跡出土赤生土器実測図(1) (縮尺1/4)

7は、西北コーナーの北壁寄りで、伏せた状態で出土している。胎土には石砂粒を多く含み色調は明黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面調整はナデ、内面は不鮮明ながらヘラ磨きである。口径17.3cm、底部径9.0cm、器高8.0cmを測る。

壺形土器（第11図12～15・第12図1）

12は、頸部に沈線が施された壺形土器の胴部片である。胎土の石砂粒は少量で、色調は表面が赤褐色、内面が灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、不鮮明であるが、ナデないしへラ磨きと思われる。内面には肩部から頸部にかけての指頭調整痕が残されているほか先の押圧痕が残されている。推定の頸部径10.6cm、胸部最大径18.8cmを測る。

13は、球体の制節をもつ壺形土器である。胎土に混入される石砂粒は少量で、色調は表面が黄褐色、内面が灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、ナデ調整である。肩部から胴部にかけては、刺突文と線刻文の組み合わせで絵画が描かれている。土器の半分が欠損しているため、全体の構図は不明であるが、上方の絵は線刻の上にヘラ先の刺突文を重ね、下方の絵は線刻と径0.6cm程の竹管文3箇とで成り立っている。頸部径5.1cm、胸部最大径17.2cm、現存の器高17.6cmを測り、底部はやや突出ぎみの丸底である。

14は、胴部がやや算盤玉状に張り出るもので、東北コーナーから出土している。胎土には石砂粒を混入し、色調は表面が茶褐色、内面が黒灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、胴部最大径までがナナメハケ目、以下がヨコ及びタテのハケ目である。胴部最大径は19.6cmで、底部はやや突出ぎみで丸底に近いものと思われる。

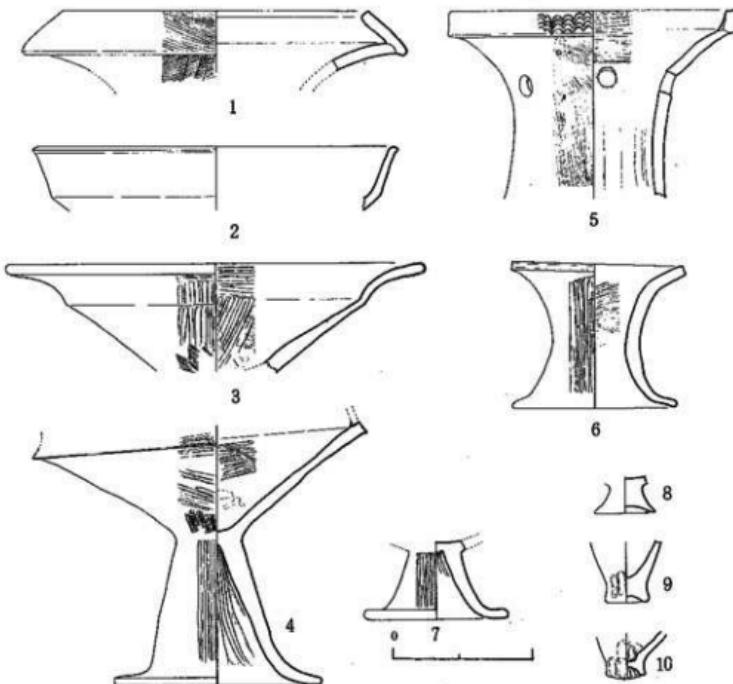
15は、14より一層算盤玉に近い形状を示すもので、やや底は深くなっている。中央部の東から出土している。底部から胴部にかけての4条の線刻文が認められ、胎土にはやや大きめの石砂粒を含み、色調は表面が濃赤褐色、内面が灰褐色を呈し、焼成は良好である。胴部最大径16.5cm、底部径3.4cmで、底部から胴部最大径までの高さ7.7cmである。

第12図1は、壺形土器の二重口縁部で、第11図4の高杯形土器の南から出土している。胎土にはやや大きめの石砂粒を含み、色調は淡赤褐色、断面が灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、ヨコ及びナメのハケ目で、頸部にかけての部分で調整具の止め跡を認めることができる。口縁内面はナデ調整である。口径23.0cm、二重口縁部の最大径28.8cmを測る。

高杯形土器（第12図2～4・7）

2は、第12図5の器台形土器の西約40cmの地点から出土している。胎土は石砂粒を余り含まず精緻なもので、色調は褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、ナデ調整である。口縁端部に若干の粘土の張り出しをみる。推定口径26.4cmを測る。

3は、2と混在した状態で出土している。胎土の石砂粒は少なく、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、口縁端部がヨコのヘラ磨きで、以下がタテのヘラ磨き、さらにくびれ部にかけてがナナメのハケ目になっている。また、内面は、大きく外反した口縁部がヨコのヘラ磨きで、以下はハケ目で一度調整した後ヘラ磨きでハケ目を消している。推定は径31.4cmを測る。



第12図 Y-2号住居跡出土赤生土器実測(2)(縮尺1/4)

4は、西北コーナーの中央部寄りから出土している。ほぼ完形を保っているが、二重口縁に立ち上がると思われる口縁部を欠損している。胎土は石砂粒が少なく精緻で、色調は淡黄褐色～淡赤褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。杯部最大径24.9cm、くびれ部径4.8cm、底部径15.7cm、現存器高19.5cmを測る。

7は、器台形土器の西約60cmの地点から出土している。胎土には石砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。脚部はタテのヘラ磨き、底部端部はヨコのナデ調整である。

器台形土器(第12図5・6)

5は、東南コーナーからの出土で、裏返しの状態で出土し底部にかけてが欠損している。胎土への石砂粒の混入は少なく精緻なもので、色調は赤褐色～黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部は中凹みとなり、口縁部には櫛描波状文が施してある。透孔は一周に5箇所認められる。器面調整は、上部がヨコ及びナメのハケ目で、下部がタテのハケ目である。内面口縁端部はヨコのヘラ磨き、以下は表面よりやや太めのハケ目である。又、しばり目も認められる。口径21.6cm、胴部最小径11.5cm、現存器高14.0cmで、器壁は厚さ約0.9cmである。

6は、東北コーナーのY-1号住居跡寄りで第11図1の小型甌形土器に接して出土している。小型の器台形土器である。胎土には石砂粒を含み、色調は淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。口縁部にはやや凹みがみられ、ヨコナデ調整で、器面はタテのヘラ磨きである。内面は粗いヨコのヘラ磨きである。口径13.5cm、底部径12.4cmで、胴部最大径は6.6cmを測る。器高は約10.9cmである。

手捏ね土器(第11図6・第12図9・10)

6は、甌形の手捏ね土器で、胎土の石砂粒は少なく、色調は灰色がかった淡黄褐色を呈し、焼成は良好である。口径7.9cm、底部は不安定な平底で径3.1cm、器高約6.0cmを測り、底部厚は1.5cm程である。

9・10は、手捏ね土器の上げ底の底部と思われる。

その他の土器(第11図8・9)

小片ながら、突帯文の資料が数点出土している。8は3cm程度の大きさのもので、刻目突帯である。甕形土器の頸部と思われる。突帯下はタテのハケ目で調整されている。胎土には石砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良い。9は、高い突帯をもつもので、突帯はナデ、突帯下にはナメのハケ目で調整され、内面はヨコのハケ目である。胎土の石砂粒は少量で、色調は淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。

石 器(第13図・第14図)

磨製石鏃(第13図)

東南コーナーの器台形土器の傍で出土している。

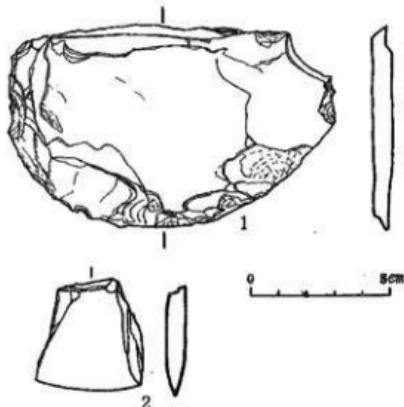
凹基式の石鏃で黒色の千枚岩系の石材を用い、全長3.6cm、最大幅2.2cm、厚さ0.4cmで、両面とも中凹みの断面形状を示す。



第13図 Y-2号住居跡出土
磨製石 実測図
(縮尺1/2)

石包丁片及び石包丁未製品

〈第14図〉



1は、石包丁の未製品と思われる黒色の千枚岩系の石材を用いている。剥離調整の段階は、いまだに未熟である。横幅11.7cm、縦幅7.2cm、厚さ0.7cmを測る。

2は、石包丁の破片である。1と同じく黒色の千枚岩系の石材を用いている。磨研は両面とも良く行われている。現存横幅3.8cm、現存縦幅4.0cm、厚さ0.7cmを測る。

第14図 Y-2号住居跡出土石包丁片及び
石包丁未製品実測図(縮尺1/2)

3. Y-3号住居跡

a. 遺構(第15図)

Y-3号住居跡は、Y-2号住居跡の西約4mの地点に位置している。住居跡は、西側の大半が重機による掘削で既に破壊されてしまい、残すは東側の4分の1弱程度であった。円形の住居跡と思われ、残された弧状のプランから推定する限り、Y-2号住居跡よりやや大きめの住居跡であったと考えられる。現存の南北での最大幅は、約6mを測る。張り出し部は、約2m 30cmの等間隔で3箇所認められ、現存での床面までの深さ約30cmである。

b. 遺物(第16図 第17図)

土器(第16図)

變形土器(第16図1~3)

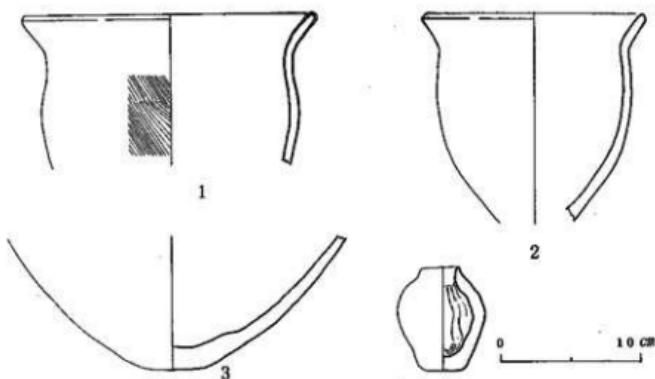
1は、胴部最大径が口縁部径より小さくなるタイプの變形土器で、胎土には石砂粒を比較的多く含み、色調は濃赤褐色を呈し、焼成は良好である。器面には、煤が付着している。調整は、表面がやや粗いナナメのハケ目で、内面はナデ調整である。推定は径21.0cm、胴部最大径18.5cm、現存器高10.9cmを測り、器壁厚は0.7cmである。

2は、南側の張り出し部の傍で出土し、1と同じく胴部最大径は口縁部径より小さいタイプである。胎土には、石砂粒を多量に含み、色調は赤褐色を呈し、焼成はさほど良くない。器面には煤が付着している。口縁部の外反はゆるやかで、底部は上げ底のものがつくと思われる。口径15.4cm、胴部最大径14.0cm、現存器高は14.8cmを測る。

3は、中央の張り出し部の北側で、床面に埋まった状態で出土している。埋め甕として使用されたものと思われるが、底部のみの遺存である。胎土には石砂粒を比較的多く含み、色調は淡黄褐色で一部灰褐色～黒灰色を呈し、焼成は良好である。底面には、煤を若干付着させている。器面は丁寧に半磨研され、内面はヨコ及びナナメのハデである。現存最大径24.2cm、現存器高9.5cmを測り、器壁厚約0.8cm、底部厚約1.6cmである。



第15図 Y-3号住居跡実測図(縮尺1/80)



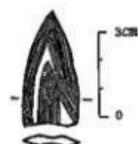
第16図 Y-3号住居跡出土胎生土器実測図
手捏ね土器(第16図4)

4は、中央部付近から出土した。胎土には石砂粒をやや多く含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。器壁厚は約0.9cmと厚く、内面には指痕痕としづり目をみることが出来る。表面は粗く削り調整がなされている。口径2.5cm、胸部最大径6.2cm、底部径2.5cm、器高7.3cmを測る。

石 器 (第17図)

磨製石鎌(第17図)

黒色の千枚岩を用いた凹基式の石鎌で、全長4.1cm
最大幅2.0cm、厚さ0.4cmを測り、両面とも中凹みの
断面形状を示す。



第17図 Y-3号住居跡出土
磨製品石 開口部実測図
(縮尺1/2)

4. Y-4号住居跡

a. 遺構(第18図)

Y-4号住居跡は、Y-1号住居跡の南約5mの地点に位置している。約3m70cm×2m
80cmの長方形の形状を示し、住居跡としてはやや小型で、床面の精査でもピット等が検出されなかったことなどから、いわゆる住居跡と呼べるものか否か疑問が残るが、ここでは一応住居跡と呼んでおきたいと思う。最も深い部分で床面までが、約40cmである。

長軸はほぼ東西を指している。

遺物の出土はまばらで、東側に片寄っており
遺物の出土レベルもかなり床面から浮いた状態
であった。ただ、朱玉が床面近くから出土して
いる。又、東北端近くでは、線刻文のある小形
土器の底部が出土している。

b. 遺 物 (第 19 図)

土 器 (第 19 図)

底 部 (第 19 図 1~3)

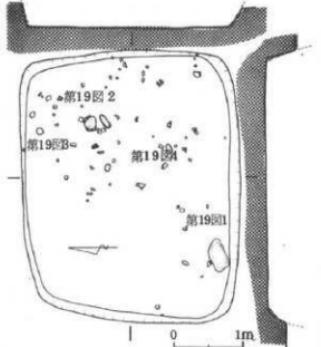
1は、上げ底の小型土器である。胎土は石砂
粒が少なく精緻で、色調は淡白黄色を呈し、焼
成は良好である。器面は丁寧に磨研されている。

現存最大径 6.5 cm、底部径 2.7 cm、現存器高 4.6 cm を測り、器壁厚は薄く約 0.5 cm である。

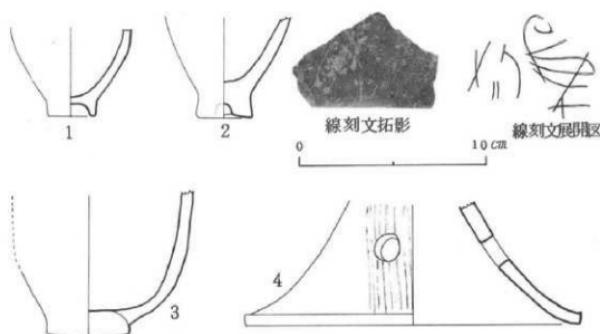
2は、線刻文のある小型土器である。胎土には、やや多くの石砂粒が混入され、ためか器面
の剥離が若干進んでいる。色調は、白黄色を呈し、線刻文の描かれた部分は黒灰色を呈して
いる。焼成は良好である。底部は若干の上げ底で、中央部には貫通していないが、孔が穿たれて

Level 150.527

Level 150.527



第 18 図 Y-4 号住居跡実測図
(縮尺 1/80)



第 19 図 Y-4 号住居跡出土弥生土器実測図 (縮尺 1/3)

いる。現存最大径 6.7 cm、底部径 3.1 cm、現存器高 5.4 cm を測る。

線刻文は、本遺跡出土の線刻文土器中最も絵画的なもので、鳥を表現したものと思われる。

3は、北壁寄りから出土した不成形な土器の底部である。砂質の強い胎土で、色調は白黄色を呈し、焼成はやや良である。器面の調整は不明であるが、底面は磨研されている。底部は張り付けである。底部径 4.5 cm、現存器高 7.8 cm を測る。

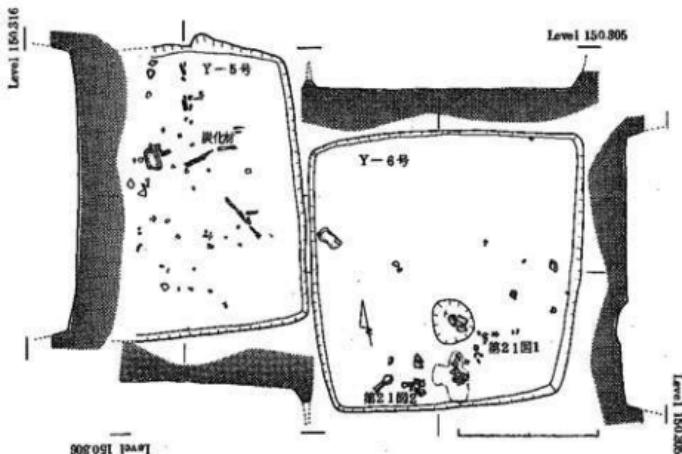
高杯形土器（第 19 図 4）

4は、高杯形土器の脚部である。胎土は砂質がやや強く、色調は淡赤褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整はヘラ磨きで、円形の透孔を持つ。底部端部には、若干の粘土の張り出しせみる。底部径 1.8 cm、現存器高 6.5 cm を測る。

5. Y-5 号住居跡

a. 遺構（第 20 図）

Y-5 号住居跡は、本遺跡発見の契機の一つとなった遺構で、道路建設のための重機による



第 20 図 Y-5・6 号住居跡実測図（縮尺 1/80）

掘削で半壊している。東壁の南北幅約3m70cm、現存での床面までの深さ約20cmである。

遺物の出土は少ないが、炭化材が比較的良く残っており、屋根組みに使用されたものと思われる。

6. Y-6号住居跡

a. 遺構(第20図)

Y-6号住居跡は、Y-5号住居跡の東に、わずか10cm足らずの距離で近接している。やや台形状に近い形状を示し、南北幅約3m70cm、北壁の東西幅約3m90cm、南壁の東西幅約3m20cmを測る。現存での床面までの深さ約20cmである。中央部よりやや南壁寄りに床面からの深さ約10cm、径約60cmの凹みがあり、さらにその南側には粘土と焼土の塊りがある。炉跡とみてよいと思われる。

遺物の出土は、ほぼ南壁寄りに限られているが、点数は少ない。不幸にして、半壊はしていたが良好な資料であった長頸壺1点が盗難に会うという事件が発生したが、その後の整理で2個の長頸壺が復原され、合計3点の長頸壺がY-6号住居跡には存在したことになる。

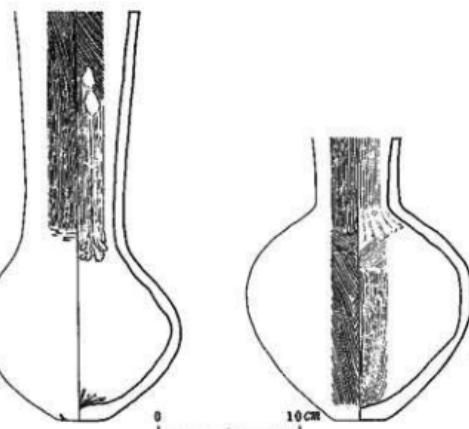
b. 遺物(第21図)

土器

長頸壺形土器(第21図)

1・2)

1は、胎土に混入される石砂粒が多く、色調は暗赤褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、表面の頸部が細いハケ目で、内面の頸部は上部がナメのハケ目、下部がヘラ磨きである。胴部最大径14.1cm、底部径3.2cm、頸部最小径7.0cmを測り、欠損した口縁部にかけてやや広くな



第21図 Y-6号住居跡出土長頸壺形土器実測図
(縮尺1/4)

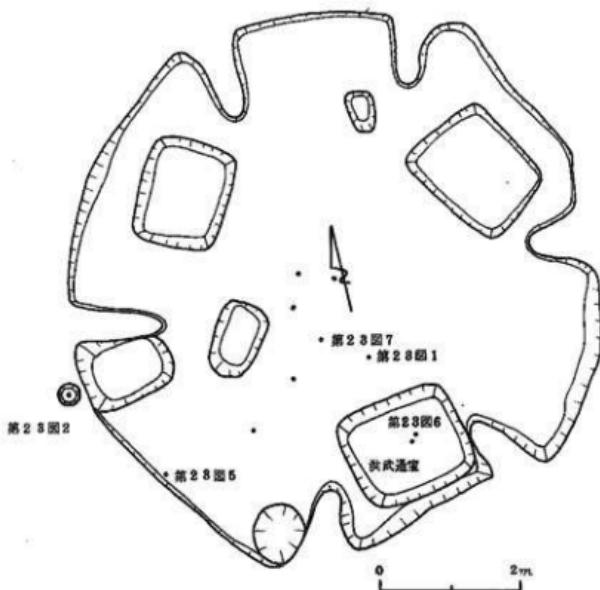
る。現存器高 29.2 cm である。

2は、胎土に石砂粒を含み、色調は赤褐色～黒褐色を呈し、焼成は良である。器底の調整は表裏ともハケ目で、胴部から底部にかけても比較的丁寧に調整されている。胴部最大径 16.0 cm、底部径 3.4 cm、頸部最小径 5.9 cm、現存器高 19.8 cm を測る。

7. Y-7号住居跡

a. 遺構(第22図)

Y-7号住居跡は、Y-6号住居跡の東約7mの地点に位置している。径約7m60cmの円形のプランで、6箇所に張り出し部をもつ。現存での床面までの深さ約30cmである。住居跡内には、大小6箇の土壙が掘り込まれており、その内東側の約1m30cm×1m50cmのほぼ



第22図 Y-7号住居跡実測図 (縮尺1/80)

同じ大きさの2個の土壙が、「洪武通宝」及び銅製品片を出土し、明らかに後世のものと思われるほかは、遺物を全く伴なわないものであった。

遺物の出土は、住居跡中央部から若干東南寄りの地点で、特異な線刻文をもつ壺形土器が出土し、また住居跡の西の住居跡外のピットからも線刻文をもつ長頸の壺形土器が出土し、注目される資料となった。

b. 遺 物 (第23図)

土 器(第23図)

壺形土器(第23図1・2・6)

1は、特異な線刻文をもつ壺形土器で、胎土は石砂粒の混入が少なく精緻なもので、色調は白黄色、断面が灰白黄色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、全面をハケ目調整の上、磨き消しているが、底部にかけては幅広のハケ目を有する種文様的に残している。線刻文は、特異なもので、線刻の幅は広く約2~3mmを測る。文様の全体は、欠損している部分があるため明らかではないが、一筆描きに近い連続的な線で、幾何学的な文様を描いている。胴部最大径18.0cm、現存器高21.3cmを測り、頸部の推定径は約7.1cmである。

2は、ピットに埋められたような状態で出土している。胎土には石砂粒を少量混入し、色調は赤褐色、内面は黒褐色を呈し、焼成は良好である。器面は削り調整である。線刻文の線刻は1に比べ細く、縦線を中心に、それに向かって弧状の横線が、右に3条、左に5条引かれている。器高約23.5cm、口径9.7cm、頸部最小径7.1cm、胴部最大径15.6cm、底部径4.6cmを測る。

6は、石砂粒を比較的多く含み、色調は茶褐色を呈し、焼成は良好である。器面はナデ調整内面はハケ目調整で、調整具の止め跡をみるとめる。胴部最大径15.2cm、底部径4.0cm、現存器高9.0cmを測る。

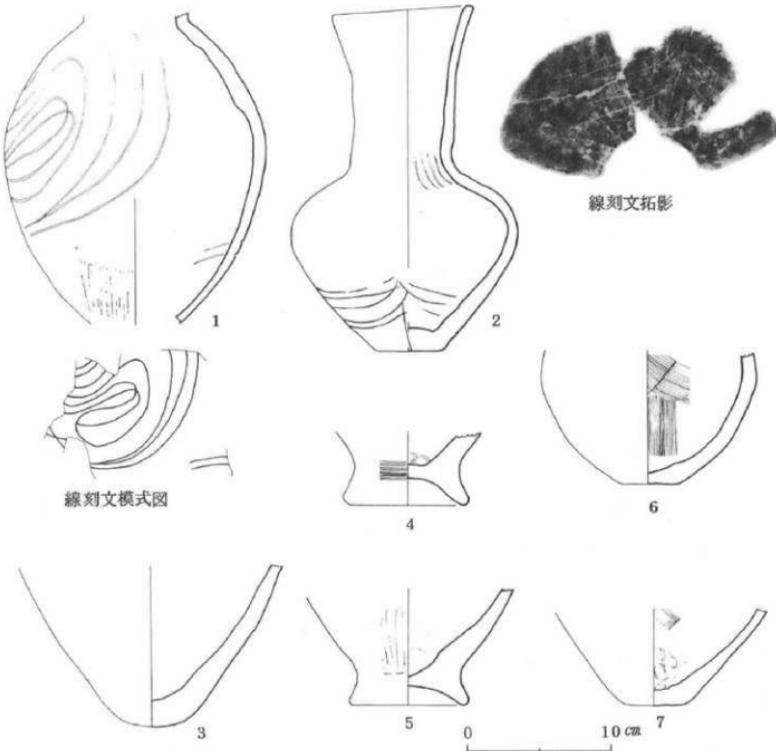
底 部(第23図3~5・7)

3は、石砂粒を多く含む砂質の強い胎土で、色調は茶褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成は良好である。現存胴部最大径18.3cm、現存器高10.9cmを測る。

4は、石砂粒多く、色調は黄褐色、内面は黒灰色を呈し、焼成は良好である。上げ底の底部片である。底面には煤を付着し、器面の調整はハケ目である。底部径9.0cmを測る。

5は石砂粒多く、色調は濃赤褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成はやや良い、上げ部の底部である。器面の調整はヘラ削り、底部径 8.3 cmを測る。

7は、胎土の砂質が強く、色調は黒褐色～暗褐色を呈し、焼成は良好である。不安定な平底の底部である。器面の調整は、表面は不明であるが、内面はハケ目調整である。現存胴部最大径 14.7 cmを測る。



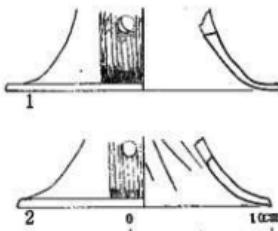
第23図 Y-7号住居跡出土弥生土器実測図（縮尺1/4）

8. 土壌及び表採の遺物

1号土壌

1号土壌はY-1号住居跡の北壁中央部に重複した状態で掘り込まれていた。約70cm×55cmの長方形を呈す。

1, 2とも高杯形土器の脚部で、円形の透孔をもつ。共に、胎土は精緻なもので、焼成もきわめて良好である。調整は、共にハケ目調整の後、それをヘラ磨きで磨き消している。1と2の違いは、底部端部の形状に若干の相違があり、又2では内面にヘラ押圧痕が残されている。色調は1が白黄色であるのに対し、2は一部黒灰色を呈している。



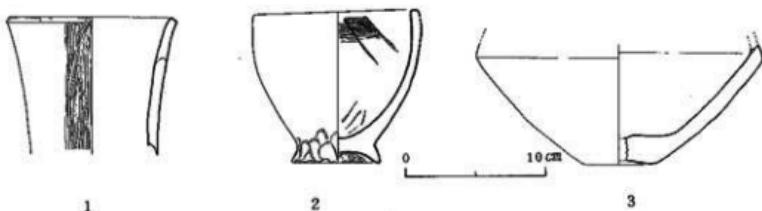
第24図 1号土壌出土高杯脚部
実測図(縮尺1/4)

2号土壌

2号土壌はY-1号住居跡の東南隅に接する状態で掘り込まれていた。約70cm×65cmのほぼ正方形に近い形状を示す。

1は長頸の壺形土器の口縁部である。胎土には石砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、ヘラ磨きで、口縁部はやや中凹みとなる。口径11.8cmを測る。

2は、上げ底の底部をもつ、小型の鉢形土器である。器面には煤が付着し、胎土に混入される石砂粒は少量で、色調は暗褐色～黒褐色、内面は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、表面の口縁部がヨコの削り調整で、内面は、ヨコのハケ目調整で、調整具の止め跡を明瞭に残している。底部はつまみ成形である。



第25図 2号土壌出土甕生土器実測図(縮尺1/4)

3は、胸部が算盤玉状に張りをもつ壺形土器の底部である。胎土には比較的多量の石砂粒を含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。内面は磨研が施してある。胸部最大径20.6cmを測る。

表採の弥生土器

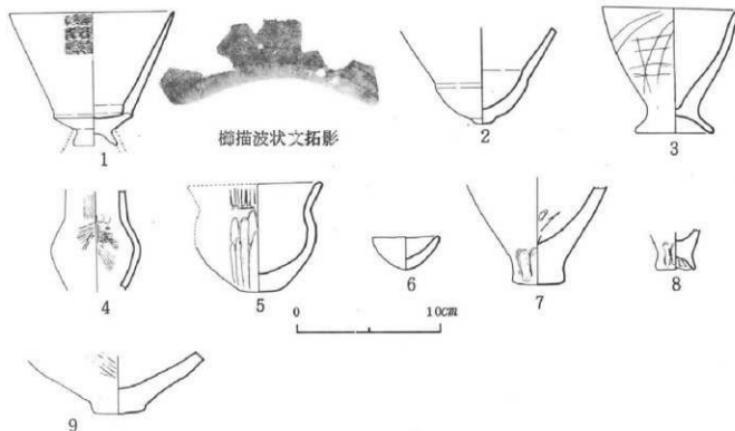
今回の調査区の周辺で、既に重機により掘削された場所から、幾つかの特徴的な土器を採集しているので、若干紹介しておきたい。

1は、底部を欠損した、高台付のグラス形土器である。胎土に混入される石砂粒は少なく精緻で、色調は一部黒灰色を呈する黄褐色で、焼成はきわめて良好である。器面は良く磨研されており、口縁部には細かい櫛描波状文が3段に分けて施文されている。

3は、上げ底の底部をもつ小型鉢形土器で、胎土の石砂粒は少なく、色調は明黄褐色を呈し焼成は良好である。器面の表面には不鮮明ながらヘラ描きの格子目状の文様が施されている。

5は、小型の壺形土器で、石砂粒を多く含み、色調は黄褐色を呈し、焼成は良好である。器面の調整は、ヘラ磨きで、内面口縁部はヨコナデ調整である。

6は、手捏ね土器で、やや砂質の強い胎土、色調は赤褐色を呈し、焼成は良好である。



第26図 表採弥生土器実測図(縮尺1/4)

第V章 中世の遺構と遺物

1. 住居跡及び溝状遺構

a. 遺構(第2図)

中世の窓穴遺構と思われる遺構は、Y-7号住居跡の北約3mの地点に位置している。住居跡というより、むしろ作小屋的なものと考えた方が良いだろう。2箇の遺構の重複したもので一辺約3m弱の正方形を示し、東壁北端には張り出し部をもつ。竹の炭化したものが多量に出土しており、竹編みの整体を用いていたものと思われる。

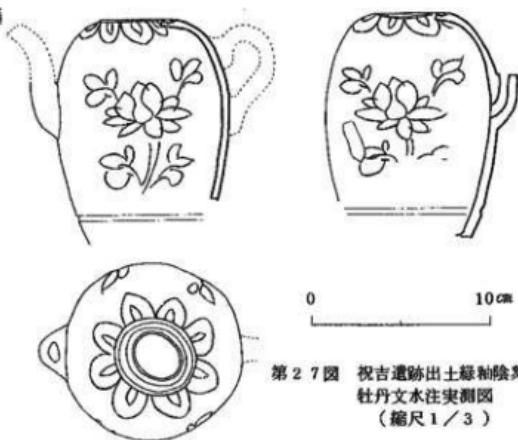
溝状遺構の全様は明らかではないが、ボラ層に掘り込まれており壁面はかなり乱れている。

b. 遺物(第27図)

縹軸陰刻牡丹文水注

溝状遺構の北側で、ボラ層中に埋められた状態で発見された。底部、取手、注口部を欠き、現存高12.5cm、口径2.5cm、胴部最大径9.7cm、器底厚0.5cmを測る。器面には縹軸が施されているが、施釉が薄く、所々既に風化もみられ、全体に光沢のない仕上げとなっている。

洪武通宝・大中通
宝(図版16-2)
Y-7号住居跡と重複
した土壙及びその周辺か
ら出土している。いずれ
も銅鏡していたものだが
洪武通宝3枚、大中通宝
1枚である。洪武通宝の
初鋤年は、1368年(明太祖)の時で、大中
通宝の初鋤年は、136
1年(元朱元璋)の時
である。



第27図 祝吉遺跡出土縹軸陰刻
牡丹文水注実測図
(縮尺1/3)

第V章 結語

今回、発掘調査された弥生時代の住居跡の内、Y-1号住居跡は磨製石器の工房跡という性格をもち、ことに注目されるものであった。都城盆地を中心としてみられる住居跡内への張り出し部は、間仕切り的機能をもつものとして、古くから注意が引かれてきた。Y-1号住居跡は、そのことを証明する良好な資料の一つとなろう。西南二方の張り出し部に囲まれる住居跡西南コーナーに、磨製石器未製品約40本余りが集中的に出土し、土器類は中央炉跡から東南コーナーにかけて集中化した出土をみた。こうした遺物の出土状態から、西南コーナーが工房区として、中央炉跡から東南コーナーが食住の定まった空間を占めていたことをうかがうこと出来る。

また、方形プランの造構Y-4~6号住居跡は、単純に住居跡と呼べるものか、若干の検討を要するところであろう。ただし、Y-4号、5号、6号とも一辺の長さ3m70cm程度とはば一定し、同時期にある種規格的役割りの中で構築されたものとみることも可能であろう。

土器は、弥生後期に属するもので、Y-2号住居跡出土の櫛描波状文をもつ器台形土器は、安國寺式系のものである。盤形土器については全体形を復原し得るもののがなかったが、Y-2号住居跡出土の小型土器を含め、良好な資料である。中でも注目されるのは、線刻文土器であるが、最も絵画的なY-4号住居跡出土の小型土器底部の線刻文から、Y-7号住居跡出土の幾何学的な線刻をもつ壺形土器とバラエティーに富んでいる。

さて、次に今回の発掘調査のある意味意外な発見は、縁軸陰刻牡丹文水注の出土で、出土状態がそもそも底部、取手、注口部を欠いたものが、意識的に埋納されたと考えられることである。この縁軸陰刻牡丹文水注は、現在のところ国内では熊本県浜乃館からの出土が知られている。三彩手付陶とも呼ばれるこの軟陶は、15世紀末南中国（福建省、広東省）で製作されたと考えられている。

浜乃館は阿蘇大宮司の館跡として知られ、1586年（天正14年）前後に島津軍の侵入により落去したとされる。その事と祝吉遺跡が島津発祥の地として知られる祝吉御所跡に近接するという符合は興味あることである。

- 註 (1) 石川恒太郎『宮崎県の考古学』（昭和43年）
(2) 田中熊雄（都城市成山遺跡の研究）宮崎大学教育学部日本史研究室（昭和49年）
(3) (1)に同じ
(4) 『日向の伝説と史蹟』
(5) 宮崎県高等学校教育研究会理科・地学部会編『宮崎県地学のガイド』（昭和54年）
(6) 『浜乃館』熊本県教育委員会

付論 祝吉遺跡木材炭化物

大 塚 誠

中世～近世住居跡、Y-5号住居跡、Y-7号住居跡、Y-1号住居跡より住居小屋組用材と見られる木材炭火物が出土したので、その樹種識別を行った。

中世～近世住居跡出土木材炭火物

ヤダケ (*Pseudosasa japonica* Makino)

カシ属 (*Cyclobalanopsis* Oerst.)

Y-5号住居跡出土木材炭化物

ヤダケ (*Pseudosasa japonica* Makino)

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

コナラ (*Quercus acutissima* Carr.)

ヤマザクラ (*Prunus Jamasakura* Sieb.)

ヒサカキ (*Eurya japonica* Thunb.)

ヒメユズリハ (*Daphniphyllum Teijsmannii* Zollinger)

Y-7号住居跡出土木材炭化物

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

Y-1号住居跡出土木材炭化物

コナラ (*Quercus acutissima* Carr.)

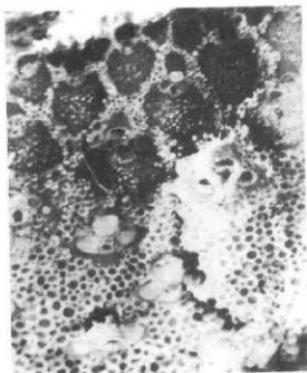
中世～近世およびY-5号住居跡より出土した竹材炭化物は、竹幹直徑1～1.5cm、竹幹壁厚0.2cm、長さ4cm程度の小片数個である。節の形態は生長帯と付着帯が明らかな2輪状態であり、芽溝は浅く、メダケ属、ヤダケ属の特徴を示している。前出葉の痕跡は小さく、1節1枝痕と見られる。又竹幹横断面の維管束の配列状態などからヤダケ属、ヤダケと推定される（写真1）。

各住居跡より採集した木材炭化物の大部分は、カシ、コナラ、クリ、ヤマザクラなどの落葉広葉樹材であって、小数片の常緑広葉樹材（ヒメユズリハ、ヒサカキ）が認められる。既往の

調査結果と同様に、針葉樹材は全く含まれない。

これらのことから当時の住居近くには、現在の林相とはほぼ同様な広葉樹林が存在していたものと想像される。

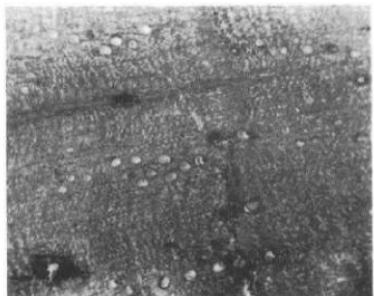
1. ヤダケ



節部の形態

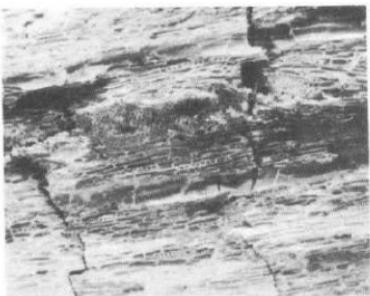
維管束の配列

2. カシ



木口面

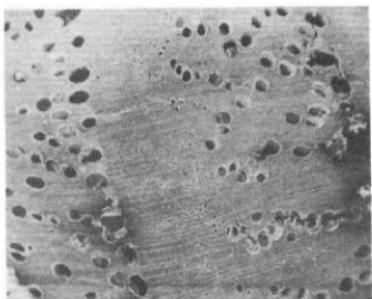
×50



板目面

×100

3. クリ



木口面

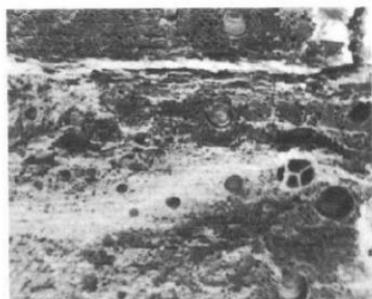
×30



板目面

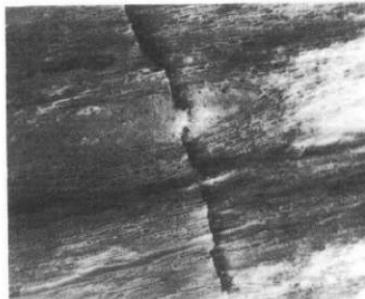
×200

4. コナラ



木口面

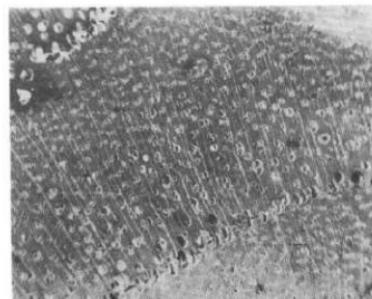
×50



板目面

×100

5. ヤマザクラ



木口面

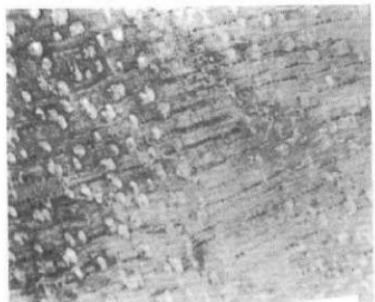
×30



板目面

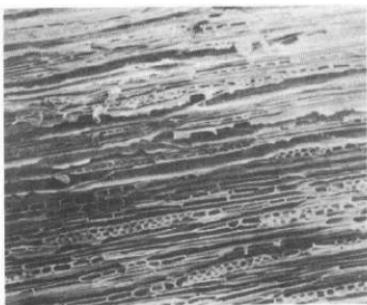
×200

6. ヒサカキ



木口面

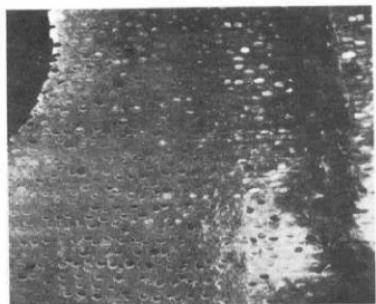
×100



板目面

×200

7. ヒメユズリハ



木口面

×50



板目面

×200

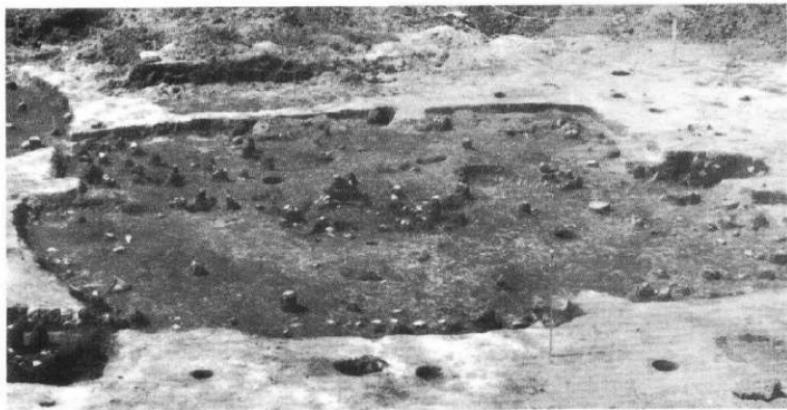
図版



(1) 遺跡遠景（沖水川の堤防から）



(2) Y-1号住居跡（発掘前）



(上) Y—1号住居跡（発掘後）

(下) Y—1号住居跡東南隅及び2号土壙遺物出土状況





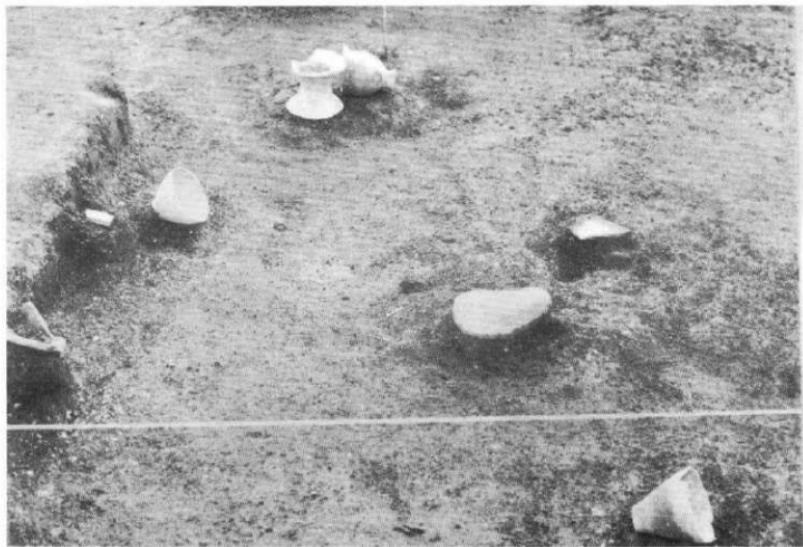
(上)Y-2号住居跡（上は、3号土壙とY-4号住居跡）



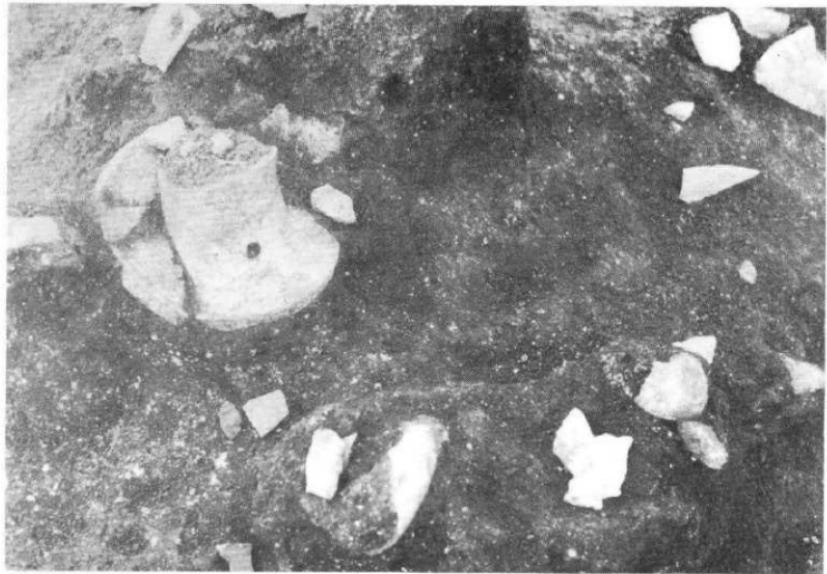
(下)Y-2号住居跡高杯及び小型甕形土器出土状況



(1) Y-2号住居跡鉢形土器及び小型壺形土器出土状況



(2) Y-2号住居跡小型器台及び小型鉢形土器出土状況



(1) Y-2号住居跡器台及び小型鉢形土器出土状況



(2) Y-2号住居跡及びY-3号住居跡（手前）

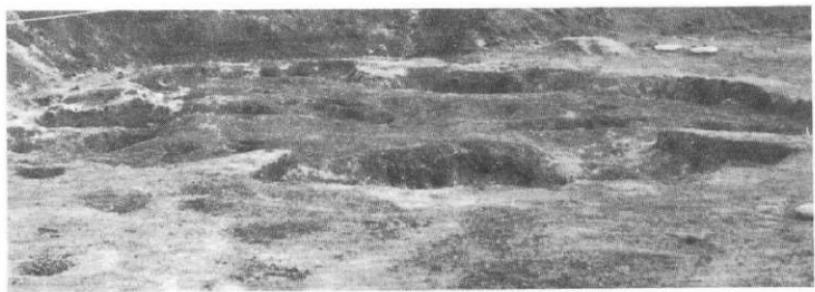
(1) Y—3号住居跡



(2) Y—4号住居跡及び3号土壤

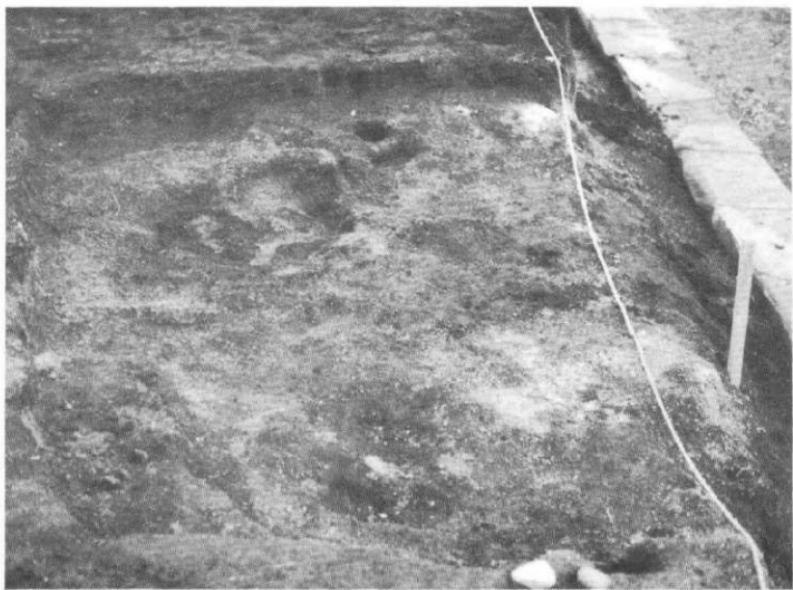


(3) Y—7号住居跡





(1) Y-6号住居跡



(2) Y-5号住居跡

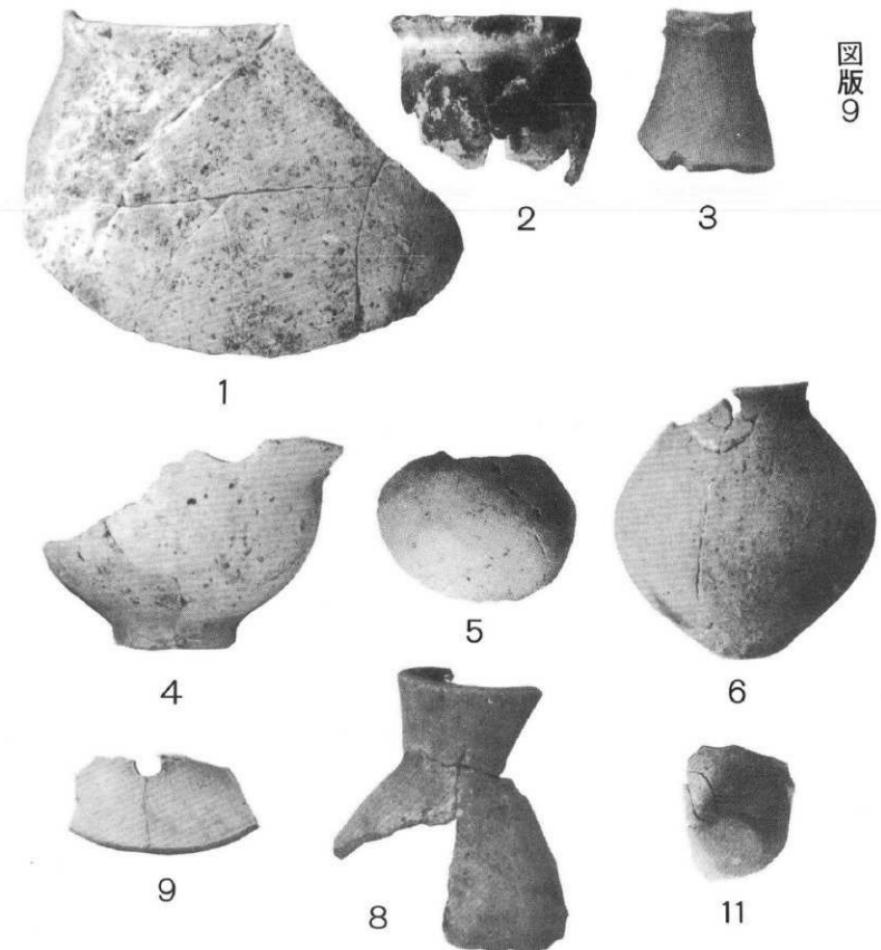


(1) 中世遺構（住居跡及び溝状遺構・発掘前）



(2) 中世遺構（住居跡・発掘後）

図版9



櫛描波状文拡大

7

Y-1号住居跡出土弥生土器（第5図）



1



2



3



4



5



6



7



10



11

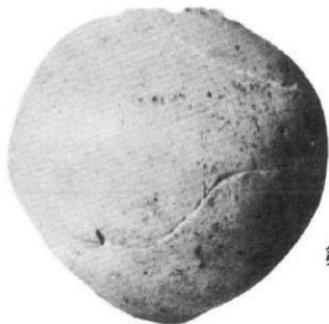


12



14

Y-2号住居跡出土弥生土器（第11図）



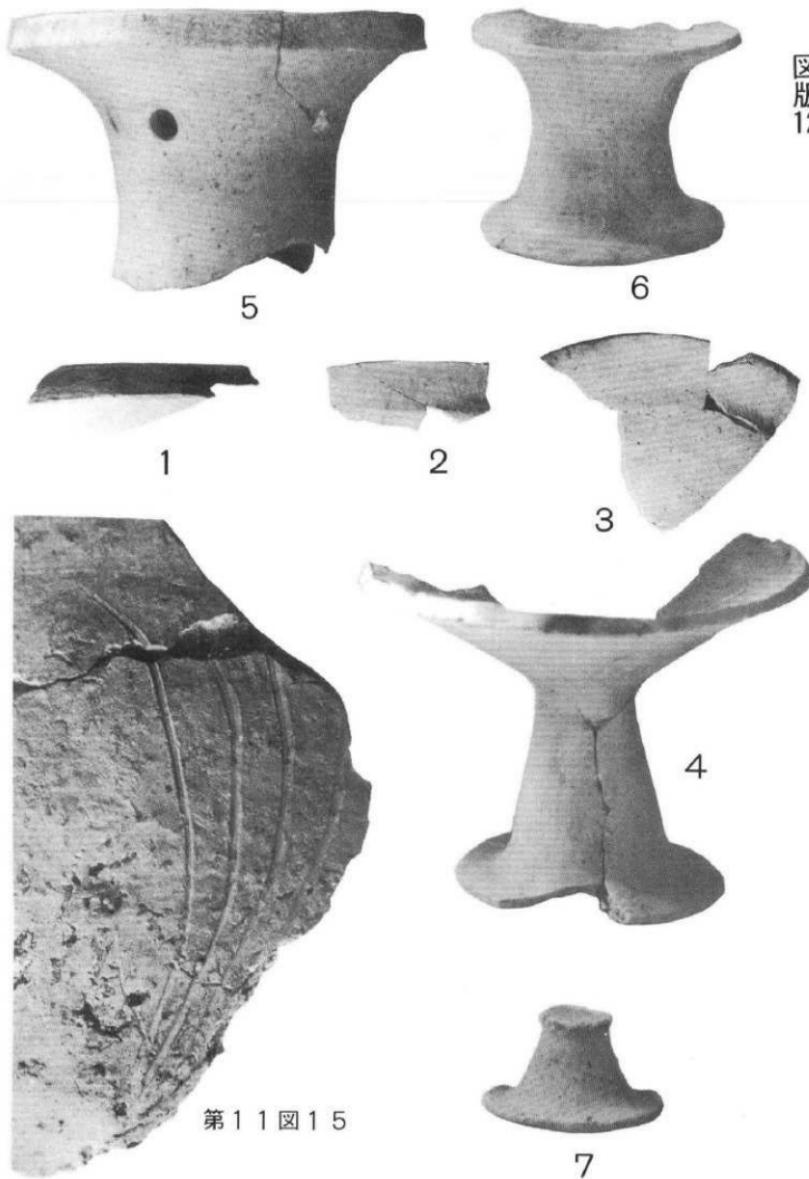
第11図11



線刻文拡大



Y-2号住居跡出土線刻文壺形土器



第11図15

Y-2号住居跡出土弥生土器（第12図）



第16図1



第16図3



第16図4



第19図1



第19図3



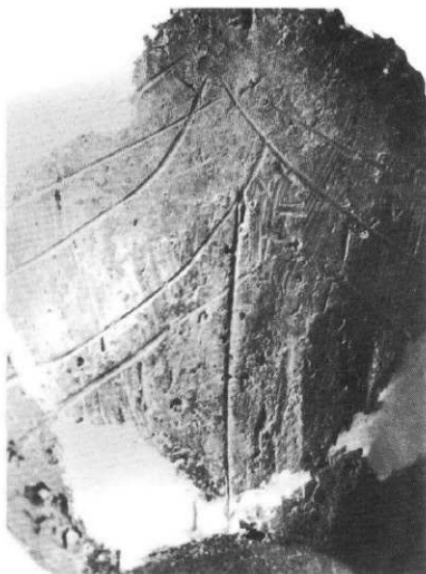
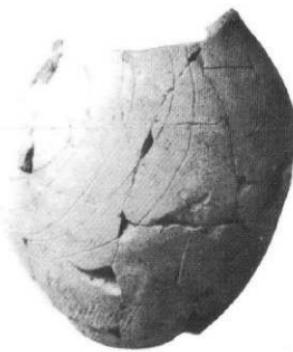
線刻文拡大



第19図4



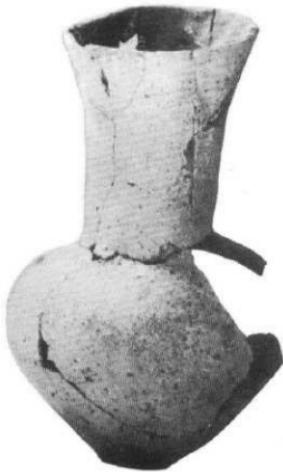
第19図2



線刻文拡大



線
刻
文
拡
大



Y-7号住居跡出土線刻文壺形土器(第23図)



第23図4



第23図3



第23図7



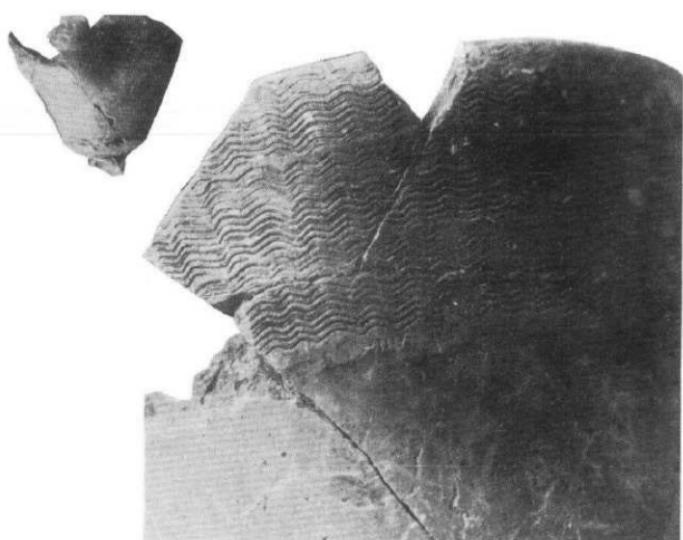
第21図1



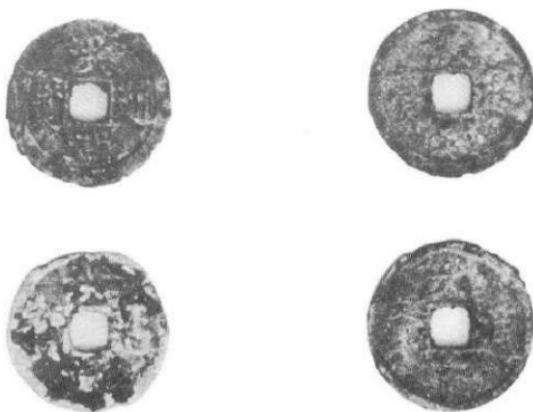
第21図2



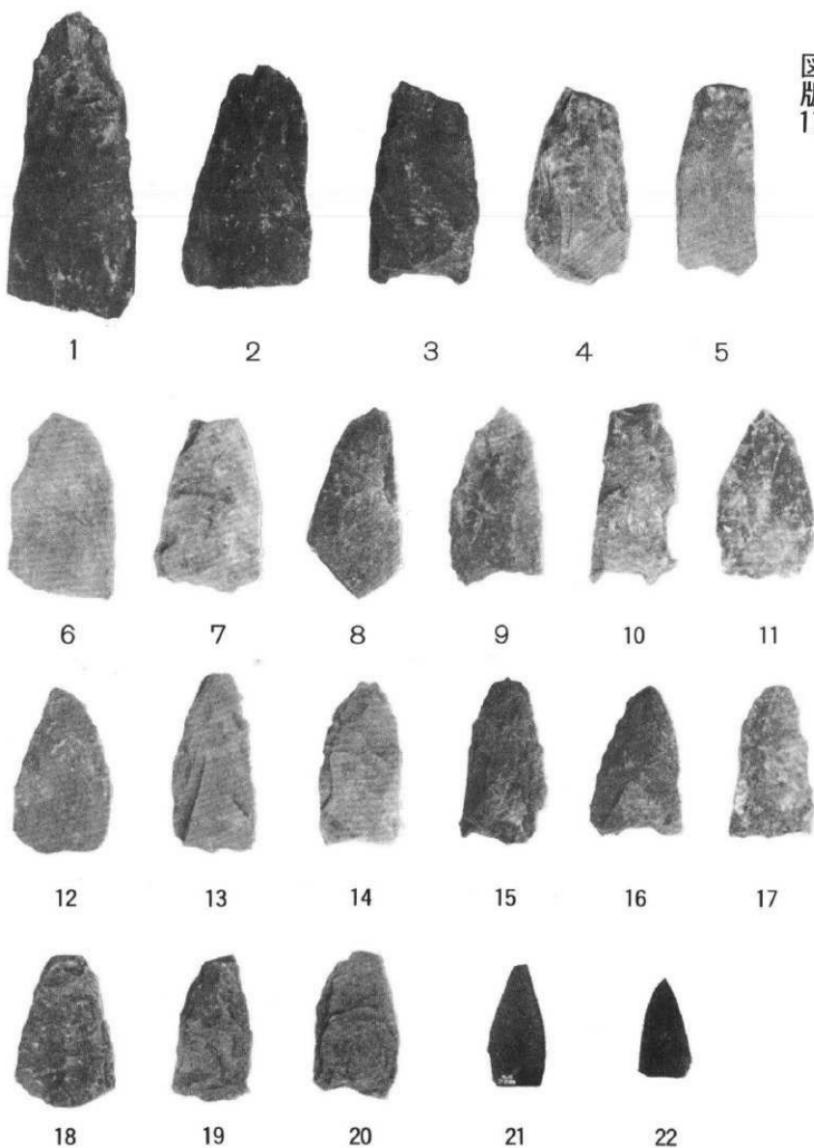
Y-6号・Y-7号住居跡出土弥生土器(第21図・第23図)
及び表探弥生土器



(1) 表採櫛描波狀文土器



(2) 第 I 地區出土「洪武通寶」「大中通寶」



Y-1号住居跡出土磨製石鏃・未製品（第8図）



Y-1号住居跡出土
土錘様土製品 (第6図)



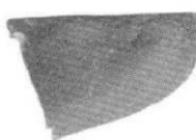
Y-1号住居跡出土石包丁 (第7図1)



Y-2号住居跡
出土磨製石鎌
(第13図)



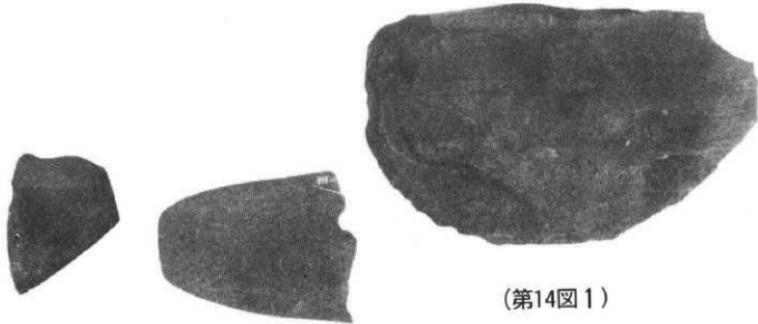
Y-3号住居跡
出土磨製石鎌
(第17図)



(第7図2)



Y-2号住居跡出土石包丁
・未製品 (第14図2)



(第14図1)

表採石包丁片

都城市文化財調査報告書
第 1 集

祝 吉 遺 跡

発行 昭和56年3月31日
都城市教育委員会

印刷 (株) 東 謄 写 堂